

[江戸時代の絵画展によせて]

## 「人物図扇面」について

紙本着色 幅54.2cm 江戸時代前期

江戸時代の絵画を考えていますと、日常生活の中に芸術作品が活きているように思えます。鑑賞といっても、現在の私たちのように構えて見るのではなく、もっと身近に芸術作品に親しんでいたのではないかと感じるのです。

殊に、愛らしい小画面の作品を見る場合、そういった印象を強く受けます。迫力ある大画面の作品も素晴らしいものですが、心惹かれる小品に出会った場合、なぜか当時の人々の生の感情に触れたような気持ちになります。

扇面画もそういった作品の一つです。今回の展覧にも、重要文化財に指定されており、尾形光琳筆「扇面貼交手筈」をはじめ、扇面画作品が数点出陳されます。

ここでは、その中の一点、「人物図扇面」についてご紹介いたします。

この作品は現在軸装となつていますが、明瞭に残る折れ跡から、長く実用されていたことが分かります。当初は十五本の骨をもつ、やや大振りの扇面であったようです。

画面には、右手に殿舎が見え、その後ろから松の太木が伸び、逞しく枝を広げます。その松の枝の下には、中国風の衣裳を着た二十人の男女が描かれています。美しい敷瓦を敷き詰めた豪華な床の装

飾を見ますと、どうやら宮廷での風俗を写したようです。

細線をもちいて非常に丁寧な描かれ、多くの顔料をつかい華麗に彩色された画面には細密画の趣があります。

画中の人物は、左右に分かれて配され、中央付近にいる宮女達は双方から花を付けた枝を出し合い、争っているようにも見えます。興味を惹く場面が描かれるのですが、実は、これは玄宗皇帝と楊貴妃にまつわる故事に取材するものです。

『開元天寶遺事』という書物に、唐の玄宗皇帝が楊貴妃に宮女百余人を統べさせ、自らも貴人百余人を率いて、宮中の庭で両陣に分かれ、戯れに戦いあったという記載があり、風流陣と呼ばれています。本図に描かれる情景は、まさにこの場面です。風流とは雅やかな様という意ですので、優美に洗練された遊戯であったのでしょう。

本図では、画面の右に唐冠をつけ、軍配を手に味方を鼓舞する人物がいますが、この髭を蓄えた威風堂々とした人物が玄宗皇帝に、画面の左奥、鳳凰の髪飾りをつけ、豹皮の敷物をひいた椅子に座る婦人が楊貴妃にあたります。

ところが、同書にはこの遊戯は不詳之兆となり、有名な安祿山の

乱がおこったという記載が続きます。このため玄宗皇帝は蜀に逃れますが、その途上楊貴妃は馬嵬の地で惨殺されてしまうのです。この悲しい物語を知りますと、美しく彩られた本図も、にわか陰影を帯びてきます。

玄宗皇帝と楊貴妃の物語は、早くから我国に伝えられました。殊に白楽天の作った著名な長編叙事詩「長恨歌」は、『源氏物語』などの王朝文学に大きな影響を与えたと考えられています。

また、これらの文学作品には、この物語に取材した絵画作品が屏風や絵巻物に描かれたことが記され、絵画作品も既に平安時代から鑑賞されていたことが分かります。

しかしながら、当時の作品は残されておらず、現在残されている作品で見るかぎり、室町時代の後期まで待たねばなりません。日本美術の伝統のなかで、このような唐の宮廷風俗図が、どのように展開していったかは、非常に興味深い問題です。

本図は、岩や樹木の描法から狩野派の技法を身につけた画人による江戸時代の作品と考えられます。この時代になりますと、屏風絵や襖絵など、さまざまな形式をとる唐の宮廷風俗図が残されています。もちろん、本図と同様に扇面に描かれた作品もあります。

しかし、これらの作品と比較しますと、本図には通常の扇面画には見られない画面構成上の特色が指摘できます。それは画面上部の金雲の切れ間に施された装飾模様です。

本来ならばこの部分には、遠景

の山を覗かせる場合が多いのですが、本図では、赤く彩色した上に金泥によって模様を施されます。このため、純粋な鑑賞絵画とは少々異なった印象を与えるのです。

このような装飾は、能に使用される扇に見出せるものです。能扇は能の持ち道具のなかで最も重視され、その図様についても、翁の持つ翁扇は神仙境の蓬萊山というように、役柄によっておおよそのきまりがあります。

そのきまりに依りますと、本図は雙扇に分類できます。雙をかぶる役、すなわち、女性を主人公にする能を一般に雙物と呼びますが、同様に女性が持つ扇を雙扇といい、その図柄には、「花卉図」とともに本図のような「唐美人図」が多く採用されるのです。

能には文字どおり『楊貴妃』という曲目があります。玄宗皇帝に仕える方士（道教の呪術士）が、蓬萊宮に今は亡き楊貴妃の靈魂を尋ねる物語ですが、この楊貴妃を演じる際、「人物図扇面」の楊貴妃と同じく鳳凰の冠をつけるのも面白い共通点です。

この扇を手にして優雅に舞う能役者の姿を思い浮かべますと、作品がより一層いきいきと身近に感じられます。

作品にはかならず生み出された背景があります。作品の美しさに魅了された後、いったいどのように鑑賞されたのかと想像をふくらませるのは、非常に楽しいことです。(中部義隆)

人物図扇面 江戸時代前期



同(部分・楊貴妃)



同(部分・玄宗皇帝)



同(部分・装飾模様)



季刊 美のたより No.87

平成元年 5月 19日

発行 大和文華館